

記憶のかたち

学習院女子高等科二年 吉田 桜

私は、ハリーポッターの作品が好きだ。魔法が作り出す不思議な世界観に浸りながら、現実にもこんな魔法があったらいいな、と想像を膨らませる。数多ある魔法の中でも、私が特に好きな魔法が「憂いのふるい」だ。これは記憶を保存・再現できる魔法の道具だ。銀色の液体が入った石の水盆のような外見で、杖を使って頭の中から記憶を取り出してこのふるいに入れ、保存する。再び記憶を追体験したいときには、再度杖を使ってふるいから記憶を取り出し、頭に記憶を戻す。するとその場の空気、音、感情までもが蘇り、まるで当時の世界に戻ったかのように追体験することができるという。

もしこの魔法が現実にあったなら、私は迷わず祖母との記憶を保存したい。

一年前、大好きだった祖母が亡くなった。我が家は両親が共働きだったため、毎年夏休みになると、五歳年上の姉とともに新幹線に乗って田舎の祖母の家を訪れた。列車の窓から見える広い田園風景が近づくにつれて、胸がわくわくしていったのを今でも覚えている。裏山の豊かな緑、川の水の冷たさ、夜に飛び交う蛍の美しさ。都会とはまるで違う、ゆったりとした時間の流れがそこにはあった。祖母との記憶は、夏休みの思い出と強く結びつき、今も夏を来るたび祖母を思い出す。

祖母はいつも早起きで、朝露に濡れた畑から新鮮な野菜を収穫していた。私はその横で、小さな手でキュウリをもぎ取り、洗って丸かじりした。昼には、裏庭で冷やしたスイカを姉と分け合い、夜になると花火をした。線香花火の最後のひと粒が消える瞬間、祖母の笑い声が暗闇の中に響いた。その笑い声が、今でも耳の奥に残っている。

祖母の、笑うとしわだらけになる顔、大きくてあたたかい手、私を抱きしめてくれたときの匂い、そのすべてが、私にとって宝物のような記憶だ。しかし祖母はもうこの世にはいない。その手に触れることも、抱きしめてもらうこともできない。触れられない代わりに、私は何度も祖母との記憶を思い出し、懐かしさと寂しさの間を行き来する。

しかしながら、人の記憶というのは残酷だ。どんなに大切に覚えていたい、忘れないでいたいと思っても、日々の中で少しずつ記憶は薄れていく。まるで、両手にすくった砂が指の間からこぼれ落ちるように、思い出も少しずつ失われていく。最初は鮮明だった祖母の声や笑顔も、時間が経つにつれて輪郭がぼやけ、夢で見てもはっきりしない。忘れたくないのに、どうしても少しずつ遠ざかってしまう。

だからこそ、「憂いのふるい」が本当に存在したら、どんなにいいだろうと思う。あの魔法の水盆に、祖母と過ごした夏の日々をそっくりそのまま保存できたら、いつでもあの優しい時間に戻ることができるのに。そう願わずにはられない。

しかし、現実にはそんな魔法は存在しない。ドイツの心理学者エビングハウス氏が証明したように、人間は忘れる生き物だ。けれど、だからこそ今ある記憶は尊いのだと思う。失われていくからこそ、その一瞬一瞬が輝きを増すのかもしれない。祖母との具体的な記憶が少しずつ薄れても、その核を作る祖母への感謝や愛情は決して消えない。私は、祖母と過ごした思い出を「感謝」という形に変えて、心の奥に残し続けたい。

そしていつか、自分が誰かに優しさを分け与えられる人になれたなら、その中にきっと祖母のぬくもりが生き続けているはずだ。記憶は形を変えても、確かに私の中に生きている。私はこれからも、祖母との日々を胸に抱きながら歩いていこうと思う。